

---

# 魂送り

緋夕 夜菊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂送り

### 【Nコード】

N5915Z

### 【作者名】

緋夕 夜菊

### 【あらすじ】

少女は舞う。

人の魂が迷わぬように。魂が魔の者の手に落ちて誰かを傷つけることが無いように。

## プロローグ

宵闇の中で、白装束の人影がゆらゆらと動いている。薄暗い景色のせいかな、その姿ははっきりと見えた。

白い人影は時に素早く、時に緩やかに、不規則に動く。その動きに合わせて白装束の袖がひらひらとなびいている。

人影の周りには、ぼんやりと光る何かがまるで意思を持っているかのように流れるように宙を舞っている。その光景を一言で表現するなら、『幻想的』と言えるだろう。

不意に、それまでばらばらに宙に浮いていた光がすうつと人影を取り囲むようにして集まり、その集合は柱のような形へと変わった。否、正確には光が大地から空へ、縦に並んだせいで細長い柱のように見えるのだ。

白い人影は、それを見ると動きを止め、静かに手を下から上に撫でるように振った。光は人影の手の動きに呼応するように音もたてずに空に吸い込まれ、やがて闇に溶けていつて見えなくなってしまう。

人影は光が空へ昇っていくのを見て、無言で手を合わせる。暫くそうやって微動だにせず佇んでいた。

どれくらいそうしていたのだろうか。

人影は光が昇っていった空を黙って見上げると、何事も無かったかのように踵を返してその場から歩み去った。

人影が遠くへ行くにつれて足音が徐々に小さくなっていく。

やがて、人影が見えなくなると、そこには誰かがいて何かをしていたということが信じられないほど静かで、見える範囲には足跡以

外は何の痕跡も残されていなかった。

## 幼馴染

晴空の下、一人の少年が住宅街から街の外れの方に向かって歩いていった。

茶色い癖つ毛に同色の瞳。どことなく幼い雰囲気を漂わせる見た目を背負った飾り気のない槍が裏切っている。

彼の名は漣れんと言い、この街唯一の道場の末っ子である。故に、槍術の腕前もそこそこで、少し槍術の心得があるくらいでは勝てないだろう。

彼は街の外れに向かっていたが、別に街を出るわけではなく、街の外れにある社やしろを目指していた。社には魂送りの儀式を行う浄化人と呼ばれる人々がいるわけで、漣は遊びに行くわけでも、暇潰しに行くわけでもない。彼は幼馴染みに他の見事をしに行くのであって、他の目的があるわけではない。

漣が槍を背負っているせいか、すれ違う人々が時折不思議そうな視線を向けてくるが、彼は気にしていない。朝の街道は人通りが少ない為、人混みに紛れる事がない。それ故に街中で槍を背負ったまま歩く漣は目立っているようだった。

社街の外れに近づくのに比例して、人を見かけなくなり、漣が目的地に着く頃には、周りに人は見あたらなかった。

社の敷地内で漣が歩を進める度に足元に敷き詰められた白い砂利が擦れあつて音をたてる。

と、引き戸がガラガラと音をたてて開いて、中から誰かがひよつこりと顔を出した。

短く切られた黒い髪とキリツとした顔立ちから漣と同年代の少年にも見えるが、体格や身に纏っている服はどう見ても女性用のもので、恐らく少年ではなく少女だろうと推測できる。そして、発せられた

声もまた少女のそれだった。

「なんだ漣か」

「なんだって何だよ」

「別に。他の人が来たと思っただけ」

少女はつまらなさそうにそう言いつつも、漣を離れにある自室へ案内する。

「時間、大丈夫なのか？」

「こんな朝から依頼入ってる事なんて滅多にないし。君こそ朝から何の用？」

彼女は漣に問いかけながらも自室に上がるよう促し、自分はさつさと室内に入っていく。それを見た漣も後を追って少女の部屋へ上がる。

「何の用って、何かあること前提で話進めるのか……」

「違う？ 君、いつも何か頼みに来るから今回もそうじゃないのかと思ったんだが」

「いや、当たってるけどな。俺の行動そんなにパターン化してるか？」

「してる」

少女に即答されて、漣は「そこは否定しろよ……ちょっとは考えてくれないじゃないか」と落ち込んで見せるが、少女は別段気にしたふうもなくお茶を淹れてきて漣に差し出した。

「で、改めて聞くけど用件は何？」

「単刀直入に言わせてもらうと、魔物退治の依頼入ったから詞音しおんに

同行して貰えないかと思つて」

「ふーん、やっぱりそうくるか。僕としては別に構わないけど、毎回それだよ。一人で行かないの？」

「あれは倒すだけじゃ駄目なんだよ。浄化人が浄化してちゃんと送つてやらないと暫くしたらまた復活するんだよ」

漣が詞音に言い返すと、詞音は「そんなこと知ってる」とため息をつく。

「何で毎回僕なのかつて聞いてる」

「幼馴染みだから頼みやすい」

即答。

詞音は一瞬驚いたように軽く目を見開いたが、やがて呆れたように小さく首を横に振った。

「そうくるんだ。……仕方ないな。ちょっと出てくるって伝えてくるから君は外で待つてて」

「ありがとな！　じゃ、後で」

漣は満足そうに笑つてそう言つと、傍らに置いていた槍を手にとつて部屋を後にした。

詞音は、とりあえず出したお茶を手早く片付けて漣と同じく部屋を出て、外出する事を告げるために別棟に向かった。

## 幼馴染（後書き）

かなりどうでもいいことかもしれないけど…  
詞音が着けてる服は巫女装束的なイメージです。



## 洞窟

漣<sup>れん</sup>が部屋<sup>やし</sup>からでて社の門<sup>もん</sup>のあたりに来て5分もしないうちに刀を携<sup>も</sup>えた詞音<sup>しおん</sup>もやってきた。

腰に差された太刀は ぱっと見れば彼女とはやや不釣り合いな大きさが、それは見た目だけであり、彼女がその刀を自らの体の一部のように自由自在に扱うことを漣は知っている。

「いつも思っけど聞かなかった事聞いていいか？」

「何？」

「何故いつも外に出るときは刀持ってるんだ？ しかも太刀」

「護身用」

漣の問いかけに、詞音は単語だけという簡潔すぎる答えを返した。だがこれはいつもの事なので漣は特に気にしない。相槌を打ってそのまま目的地に向かって歩き出すと、詞音もそれに続いた。

：

社から歩くこと数十分。2人は半ば朽ちたような とういうより、もう何年も人が立ち入っていないような洞窟の前に立っていた。周りには何もなく、生き物の気配すら感じられない。

心配になったのか、それまで何も言わなかった詞音がおもむろに

口を開いた。

「依頼とか何とか言ってたけど、場所当たってる？ 僕場所知らないけど」

「あってる。あれ？ 洞窟に行くって言わなかったっけ」

「聞いてないし言われた覚えもない」

詞音がすつとぼけたような答えを返す漣を軽く睨みながら棘のある言葉を容赦なく投げつける。これもまたこの2人の間ではよくある光景である。

「で、具体的な内容も聞かされてないんだけど」

詞音がやや不機嫌そうに言った。漣はというと、それを聞いて詞音に同行を依頼しておきながら何も伝えてなかった事を思い出したのか、そういうばそうだった、という顔をした。

「ああ、そうだったな。『最近魔物が辺りに出没してるから被害者が出る前に退治してほしい。ちなみにこの洞窟を住処すみかにしてるらしい』って話だったと思う」

「大雑把過ぎるな……そもそも魔物に住処とかあるのか？ あと、どんな奴か分かってるのか？」

「……さあ？」

質問されたところで分かる事ではなかったので、漣はひよいと肩をすくめた。詞音はそんな彼を呆れたようにちらりと見たが、ずつと黙っていて動く気配がないのを確認すると、何も言わずにため息をついてすたすたと洞窟の中へ歩き出した。

一方、詞音の質問に答えようとしてあれこれ考えていたせいで、少し遅れて置いてけぼりにされそうになっていることに気付いた漣

は一瞬ぽかんとしていたが、すぐにあとを追った。詞音のゆっくりとした足音と、あわてて追かけてきた漣の足音が洞窟の中に反響しながら闇に吸い込まれていく。

「置いてくなよ！」

「個人的にさっさと終わらせただけ。君がばーっとしてるから悪い」

ようやく追いついて一言言っただけのもの、詞音にそう言われてなんと言い返そうかと思案する。しかし何を言っても言い訳にしか聞こえないような気がして何も言えなかったため、結果的に肯定していることを示してしまった。

「ちゃんと前見ないとぶつかるよ。暗いから特に」

「見てる見て……うわっ!？」

恐らく「ちゃんと見てる」という事が言いたかったのだろうが、その言葉は最後まで紡がれる事はなく、目前に迫っていた壁にぶつかりそうになって驚いた漣本人の声で途切れることになってしまった。

詞音はそれを見て呆れたようにため息をついていたが、すぐに表情を厳しいものにして暗闇の中凝視する。それはまるで、いるはずのない、見えるはずのない何かが居るのを見ているかのようなだった。何事かと口を開こうとした漣に気づくと、詞音は人差し指を唇に当てて、静かにしろと声を出さずに伝えてきた。

「漣、魔物がここを住処にしてるって話は本当みたいだ」

「はあ？ 何をいきなり……」

「死にたくなければ、槍、構えといったほうがいいよ。……この奥に結構いるみたいだから」

詞音はそう言いながら、自らも腰に差した刀を静かに抜いた。

## 洞窟（後書き）

どうでもいい話。

詞音が刀持つてるのは私が刀を持たせたかったから。  
何か最近和風な物が好きみたいです。

遭遇（前書き）

ちょっと短めです

## 遭遇

漣<sup>れん</sup>はあたりを見回したが、暗闇が広がっているだけで何も見当たらない。

「おいおい……冗談だろ？」

「冗談でこんなこと言っ僕に何か良いことあるの？」

「……いや、ないな」

相変わらず表情ひとつ変えずに返答してくる詞音<sup>しおん</sup>。

彼女には魔の物の気配がひしひしと感じられるのだろうが、漣には全くわからない。

「無いけど冗談だと思いたかったな」

「そりや残念だったね」

持参していた槍をしぶしぶ構える漣に、詞音は素っ気なく答えながらも油断なく周囲に気を配っている。

「面倒だからさっさと終わらせない？」

「……それは同感。でもここ暗いし、詞音はともかく俺はかなり不利じゃないか？」

詞音は困ったように言う漣を横目でちらりと見た。そして本日何度目かのため息をついて懷に手を突っ込んで小さめの懷中電灯を取り出して漣にひよいと放り投げた。しかし暗くてよく見えないせいで、漣の手は見事に空を切り、懷中電灯は音を立てて地面に転がった。普通ならそこまで大きな音ではないはずなのだが、洞窟内では音が反響し、かなり大きな音になってしまった。

詞音が「何をしているんだ」と視線で訴えていたが、漣は気づいていないらしく、慌てた様子で落とした懐中電灯を拾い上げてスイッチを入れる。途端に帯状の光が漣が懐中電灯に向けた先　異形の生物がひしめいている　を照らし出す。それを見て漣は思わず顔をしかめた。

「うわ……なんだこの数……」

「沢山いるって言ったけど？」

「聞いたよ。つーか予想以上だなこりゃ」

軽くそう返しながらも、漣はさてどうしたものかと考えを巡らせる。

「じゃ、援護ならやっただげるから頑張って」

不意に詞音がそう言ってそのまま漣の後ろに引っ込んでしまった。

「はあ！？　いやいやいや……何か色々とおかしいだろソレ！」

反論も虚しく、漣は詞音によって強引に異形の群れに向かって押し出されてしまった。



## 遭遇（後書き）

今年の更新はこれで終わりです！  
皆さんよいお年を！

## 戦闘

ブン、と唸りをあげて槍が異形の姿に勢いよく突きこまれる。痛覚はあるらしく、異形の姿は奇声を発しながらこちらへ素早く向き直る。

漣は素早く槍を引き抜くと、今度は真上から槍を異形の頭めがけて振りおろした。嫌な音がして、異形の頭が潰れる。

「……はあ、これで何体目だ……？」

「いちいち数えたくもないね。それに、君。もう息があがってるけど大丈夫？」

「何もしてないお前が言うな！」

「君の要領が悪いんじゃない？ 真正面から勝負挑むからそうなるんだよ」

詞音は息を切らし始めている漣にそう言いながら、持っていた刀を軽く振って刃に付いていたぬめりけのある液体を落とした。一方詞音は余裕の表情を浮かべている上に、彼女の白装束には汚れひとつついていない。

「それに、何もしてないなんて失礼な奴だね」

ぶつぶつと文句を言いつつも、詞音は横から突然現れた怪物にいち早く気づくとを一刀両断に斬り捨てた。怪物は真つ二つになって粘ついた液体を切り口から噴出させながら落下、どさりと音を立てて地面に横たわる。それを冷めた目で見下ろしながら詞音は言葉の続きを紡ぎだす。

「僕も一応君が倒し損ねた奴をこっというふうに倒してるのにさ」

「自慢かよ」

「違うね。反論に決まってるじゃないか」

言い返すのも面倒になったのか、漣は壁にもたれかかる。十分以上も槍を振るい続けて既に十数体の魔物を屠っているのに、一向に数減る気配がないどころか、逆に増えてきているような気さえする。魔物退治の依頼にはそこそ慣れている漣にとっても、そろそろ疲れが見え始める。限界を迎える前にすべて終わらせておかなければ、死んでもおかしくはないところだが、彼はいたって冷静にこの状況でいかに早く終わらせるかを考え始める。

詞音も同様に洞窟の壁にもたれかかって、魔物が蠢ぐもぐもいている方向を黙って見ている。此方もどうやら作戦が何かを考えているようだ。

「きりがないね。なんかあるのかな……誰かが何か仕掛けたとか……」

「仕掛け？　どういうことだ？」

「うん。送られなかった魂は放置しておいても魔物に変化することがないのは君も知ってるでしょ？」

人や動物などは死ぬと、通常なら魂が抜け出してその周辺を彷徨う、あるいは思い入れのある場所、どうしても行きたかった・帰りがかった場所にいつて留まるかのどちらかで、稀に自ら路を見出して昇天するものもある。もちろん、これらは放っておいても生きている人や動物などには害は与えない。そして詞音のように浄化人と呼ばれる人々、あるいは浄化人ではないもののその素質がある者以外には、その魂達を見ることは出来ない。

それなのに何故魂が魔物へと変わり、生きているものに害を及ぼすのか。

その理由は何者かが何かの仕掛けを使って変化させているのか、もしくは何かの力が働いてそうなののかはまだ正確にはわ

っていない。

「まあ、それくらいは知ってる」

「だから、この奥に何かあるのかもしれないと思ったわけ。これじやあ僕が浄化したところで何の意味も成さないよ。一時的に魔物の姿は消えるだろうけど」

彼女の言うことはもっともだった。

もしこの奥に何かの仕掛けやら細工やらがあつたとすると、今ここで詞音が魔物を浄化して魂を送つたとしても、それは一時的な解決にしかない。時間が経てばまた魔物が現れて辺りを闊歩することになるだろう。

つまり、何かがこの奥にあつてそれが原因で魔物がここにいる、あるいは推測でしかないが魔物が増殖しているとすれば、浄化を始める前にその原因をどうにかしなくてはならなかった。

「つまりはこいつらをどうにかして奥に進まなきゃならないってことか」

「そういうこと。というわけで、無駄な戦いは避ける事だね。通り道を作ることに集中したほうがよさそう」

「戦闘回数は必要最小限に抑えろって事だろ」

「ざっくり言えばそんな感じ。……じゃ、行くよ」

言い終わると同時に、詞音は刀を正面に構えて最前列にいた化物に斬りつけ、漣もそれに続いた。

## 戦闘（後書き）

戦闘シーンが苦手なことに今更気づいてしまったorz

## 仕掛け

2つの足音が連続して洞窟内に反響して消えていく。

「……っ、しつこいな……！」

「黙って。ウルサイ」

愚痴った漣<sup>れん</sup>に眉<sup>ひそ</sup>を顰<sup>ひそ</sup>めて詞音<sup>しおん</sup>がぴしゃりと言う。

群はどうにか突破することが出来たものの、今現在2人は追われている状況にある。出来るだけ戦闘は避けたいので、とりあえずは洞窟の最奥を目指して走っていた。しかし後ろから追ってくる魔物達もあきらめる気はさらさらなく、鬼ごっこのような状況がずっと続いていた。

「まだ追ってくるのかよ……まだか!？」

「着いてたらとくに止まってる」

漣の質問に詞音はイラついているような口調で返す。その間にも走るスピードは緩めない。

洞窟内にのびている道はほぼ一本道である。そのせいでなかなか距離が開かない。

と、突然漣よりやや後ろを走っていた詞音が漣の襟を掴んでグイッと引つ張った。当然の事ながら漣の首が絞まり、止まりきれなかったせいで更に思い切り後ろにひっくり返った。

「な、なにするんだよ!」

「こっち」

少し涙目になりながら言い返す漣には目もくれず、詞音は細い枝道に体を滑り込まる。一瞬ほかんとしていた漣ははっと我に返って

追ってくる魔物の群を確認すると、詞音に倣って同じように枝道に入る。入ってみると、枝道は見た目より少しだけ広く、人1人がぎりぎり通れるだけの幅はあった。漣よりも前方に白い人影が見えるが、恐らく詞音だろう。

しばらく進むと、開けた場所に出た。漣より先に着いていた詞音は地面に描かれている複雑な形が組み合わさったような図形を興味深そうにじっと見ていた。

「うわ、何だこの難しそうな形」

「さあね。でも多分これが原因かな。誰が描いたかは知らないけど」

詞音は「甚だ迷惑な話だよね」と続けると、図形の隣にしゃがみこんだ。

「何でこれが原因かどうか分かるんだよ」

「そっか、君には見えないんだっけ」

彼女は困ったように眉を寄せながら説明を始めた。

「勘だつて言ったらそれまでだけど、なんて言ったらいいのかな…  
…いろんなものがこの中に吸い込まれてるって感じだな。かなりゆ  
っくりだけどね」

そう言つて、詞音はさてどうしたものか、と腕組みをして考え込む。やがて、諦めたようなため息をつく、鞘に収めていた刀を取り出した。何事かと驚く漣には見向きもせず、詞音はそのままその図形に斬りつけた。

硬い石、もしくは岩を抉るようなそんな音がして、妙な形をした図形に　　と言つか図形の描かれた地面に亀裂が入り、同時に一瞬だけ黒い煙が亀裂から立ち上った気がした。

「なにをしたんだ……？」

「壊した。多分これで増えないから大丈夫」

「いやいや、何が起きたのかよく分からないんだけど？」

何が起きているのかよく分かっていない漣そっちのけで詞音は来た道を引き返し始める。

「待てよ、お前そっちは」

「いいから早く。君がいなくてこつこついう場合では”送る”時色々困るんだから」

早く着いて来て、と続けて、詞音の姿は細い道に消えた。



## 仕掛け（後書き）

謎の図形は何か魔法陣的なイメージで見えていただければよいかと。

## 再遭遇

振り返りもせずさつさと進んでいく詞音しおんを見て、漣れんはふと考え込む。何かを忘れている気がするのだ。それも結構重要なことのような気がしてならない。

「なあ、詞音」

「何？」

「何か忘れてる気がするんだけど、何か心当たりないか？」

問いかけられると詞音は怪訝そうな顔をして、分からないという意思表示か、ひょいと肩をすくめて見せる。しかし、すぐに何か思いついたような表情を浮かべた。

「ああ、もしかして魔物の群のこと？」

さらつと言。

そして、それはまさに漣が思い出そうとしていたことであつた。そこまで考えて、漣はハツとした。このまま進めばその魔物の群に真っすぐ向かっていることになる。と言つてもこの道は狭いうえに一本未知なため方向転換をすることはできない。

「そんなことさらつと言うな！ どうすんだよ！？」

「別にどうもしないけど？ どうせ全部いなくなるんだからいいじゃない」

「いや、そういう問題じゃなくてだな」

漣の声を完全に無視して、詞音はすたすた進んでいつて枝道から出てしまった。慌てて漣は後を追う。

漣が枝道から出て視界に入ったのは、白装束を纏った詞音の姿だけで、不思議なことに先ほどあんなにたくさんいた魔物達はいなくなってしまうていた。

視線を詞音のほうに移すと、彼女はやっときたかとも言いいたげな表情で漣を見る。

「あれ……？ えーつと？」

「向こう側に行っちゃったみたいだよ」

どう聞こうかと考える漣の頭の中を見透かしたように、入り口とは反対側の奥の方を詞音が答える。

「行き止まりでもあったのかな。多分もうすぐ見える範囲まで戻ってくると思うから」

「つまりは俺が盾になれと？」

「そういうこと。なるべく早く終わらせるように努力はするからさ」

まあ、頑張れ。と続けながらぽんと漣の肩を軽くたたく。一方漣は嫌そうに顔を顰めたが、しぶしぶ頷く。喜んで盾役になるような人はそうそういないだろうし、大抵は嫌に決まっている。それは漣も同じだが、同行を頼みに行った時からこうなることは予想済みだった。というより、詞音に魔物になってしまった魂を浄化し、送ってもらうには、その間は漣が詞音を守らなければならぬことは知っていた。

「分かってる」

漣は不貞腐れたような声で返事を返し、詞音より前方に進み出る。ちょうどその時、無数の足音のようなものが聞こえ始めた。暗闇に目を凝らすと、人の姿ではない影がこちらに近づいてくるのが見え

た。

## 死希送り（上）

「よし、漣<sup>れん</sup>。入口まで走るぞ」

不意に詞音<sup>しおん</sup>がそう言った。

「は？ いや、何故に！？」

「ここじゃ狭すぎて動けない」

詞音はそう言うなり、漣の腕を無造作に掴んで洞窟の出入口に向かって走り出した。2人の靴音が洞窟内に反響して消えていく。それを追うように、魔物の群 恐らく最初に見たときよりも増えている が轟音にも似た音を響かせながら2人についてきていた。

…

ようやく先の方に白い光が見えた。そこに飛び出した2人は、眩しさに目を細める。それもつかの間、後ろから響いてきた音でハッと我に返る。

「そんじゃあ、前衛ヨロシク」

「……りょーかい」

漣がしぶしぶといったふうに戻事をして手に持っていた槍を構えなおす。

一方詞音は漣に隠れるようにして後ろに下がり、拝むように手を合わせて目を閉じ、小声で何か 恐らく呪文のようなものを

眩きはじめる。

その間に魔物の群は洞窟から外へ出ていた。これ以上数が増えることはないだろうとは思うが、どちらにせよかなりの数であって、正直一体一体相手にしては埒があかないし、此方こちらの体力も持たない。よって、漣は襲いかかってきたものだけに攻撃を仕掛けることを決めた。

そうこうしているうちに群の中から肉食獣のような姿をした数体が漣に向かってきた。

魔物は大概、その外見で大体何に特化しているのかが分かる。分かりやすい例を挙げれば、人型ひとのがたならば、知能が特に優れている反面、動きはそこまで素早くはなく、どちらかと言えば鈍いといった具合だ。

今連に向かって突進している獣のような姿をしたそれは、動きが早く、まともに攻撃を食らえば致命傷にもなりうると言う厄介な相手だが、人型に比べればそこまで知能は高くない。それゆえ、行動パターンが単純なので攻撃が読みやすい。

「さて、どこから相手をしたものか……」

考え込んだのもつかの間、獣の姿をした魔物が漣に飛び掛ってきた。どうしてやろうかと考えていた漣にとっては不意打ちもいいところだったが、彼の反応の方が早く、魔物の横腹めがけて槍を力任せに一閃し、空中から叩き落した。地面に激突した瞬間に奇妙な鳴き声があがったが、漣はそれを見せず、続いて突っ込んだできた二体目に槍の穂先を突き入れる。それは吸い込まれるようにして魔物の額に命中し、こちらは声を上げることなく絶命。引き抜いた槍に付着していたねばねばした液体を振り落とし、彼は再び槍を構えた。

詞音の詠唱（？）はまだ続いている。漣はいつまた襲ってきてもいいように油断なく群を見据えた。

むこうもどうやら此方の様子を伺っているらしく、一体も向かつ

てくる様子はない。

「こっちから突っ込むわけにも行かないもんでな」

「待つのは性に合わないけど……まあ、出来れば来ないでくれると凄くありがたいんだけどな」と、誰に向けたわけでもなくそう続けた。独り言を言いながらも視線は逸らさない。逸らした瞬間に攻撃を食らえばひとまりもないからだ。

と、漣はまたもや数体のみ群から離れて此方にやってくる姿を確認した。いつその事こっちに来なければよかったのに、などと考えながらも彼は槍の柄の部分をつと握り締めた。

「ちょっと下がって」

もう自分から此方へ向かってくるあの数体を倒してこようかと考えて、漣が一步を踏み出そうとしたその時、聞き慣れた声が彼の耳に届いた。同時に体ごとぐい、と後ろに引き戻される。

何事だと言言ってやろうと思って振り向こうとすると、今度はあまり馴染みのない音が聞こえた。それはまるで、何十個もの鈴を一度に鳴らしたような、そんな音であり、それと同時に漣にあることを思い出させた。

涼やかな音を聞きながら、漣は思った。

嗚呼、死希<sup>しき</sup>送りが始まる、と。

## 死希送り (上) (後書き)

死希<sup>しき</sup>送りと魂送りは大体同じような意味でとらえていただければと

魂送りは死者の魂を送る

死希送りは魂送りに浄化（魔物に変化してしまった魂を元に戻す）  
（？）みたいなもの）が追加された感じですよ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5915z/>

---

魂送り

2012年1月13日21時45分発行